

官民学連携で復興支援



展示を紹介する弘前大学ボランティアセンター長の李教授

11年の震災発生時は大学側に被災地支援の経験もノウハウもなかったが、近年は県内外の大雨や台風などの被災地でも支援活動を行った。今では「何かあれば学生がすぐ現地に行き力になれる」（李センター長）。

李センター長は「支援する側、受ける側ではなく、お互いに気遣い合う関係ができた。それが15年続けた原動力だと思う」と胸を張る。交流を続ける中で「われわれもいろんなことを学び、多くのものを頂いてきた」とも。

李センター長は「支援する側、受ける側ではなく、お互いに気遣い合う関係ができた。それが15年続けた原動力だと思う」と胸を張る。交流を続ける中で「われわれもいろんなことを学び、多くのものを頂いてきた」とも。

「チーム・オール弘前」

東日本大震災 15年

弘前大学教員有志を中心に学生、市民、行政が協働で立ち上げた「チーム・オール弘前」は東日本大震災後の2011年春から、岩手県野田村などで被災地支援を続けてきた。官民学が連携した復興支援の取り組みは全国的にも珍しく「弘前モデル」として注目され、活動に参加した学生や市民と野田村住民との交流は今も続いている。弘前大学資料館（文京町地区キャンパス内）では現在、弘前大ボランティアセンターの15年間の活動を紹介する企画展が開かれており、センター長を務める李永俊教授は「官民学連携で活動できたことが大きな力になった。われわれも活動を通じて多くのものを頂いたと思う」と振り返った。（今井珠世）

【関連記事2、3面】

「顔の見える」活動回顧

弘大ボランティアセンターが企画展

チーム・オール弘前の活動は11年4月、野田村でのがれきの撤去や救援物資の仕分けから始まった。応急支援が一段落した同年9月以降は地元の人との茶話会やイベントへの参加、学習支援などを行って交流を深めてきた。

「顔の見える支援」として、ボランティアは胸の部分に平仮名で名前を掲示し、住民ともボランティア同士とも互いに名前を呼び合える関係を構築。「学生ボランティアが新婚旅行で野田村に行った」「村の住民から今年就職だね」と声を掛けられた」「小学生の時に手紙を届けてもらってからやりとりが続き、成人してから野田村まで会いに行った」。エピソードには事欠かない。

活動の幅も広がり、県内では地域課題に対応した除雪ボランティア、子どもの学習支援などの場面でも学生が活躍している。

「チーム・オール弘前」だからできたことも多いという。学生の若い力が活躍する場面もあれば、年配の市民が学生の安全に配慮したり、助言してくれたりする。体が不自由で役に立てないという市民の声を受け、支援物資を預かって届けたことも。官民学連携で、被災地の力になりたいと願う市民が誰でも参加できる環境づくりができた。

企画展はこうした15年を振り返る内容で、ボランティアも野田村住民も笑顔の写真が目立つ。

李センター長は「活動を通じて、学生も地域で生きる力、地域への愛着が身に付いたと思う」として大学が得たものも大きかったと強調。本学に入学してくる学生には先輩方の活動を知ってぜひ参加してもらいたいし、市民の皆さまには今までやってきたことを誇りに思ってもらいたい。多くの人にチーム・オール弘前について知ってもらいたい」と述べて来場を呼び掛けた。

展示は27日までの午前10時～午後4時（入館は午後3時半まで）で、日・祝日は休館。入場は無料となっている。

展示は27日までの午前10時～午後4時（入館は午後3時半まで）で、日・祝日は休館。入場は無料となっている。

※この記事は陸奥新報社の提供です。
この画像は、当該ページに限り陸奥新報の記事利用を許諾したものです。
転載ならびにこのページへのリンクは固くお断りします。
[問い合わせ先] 弘前大学資料館
jm3432@hirosaki-u.ac.jp